活動におけるスケジュールについて

　長崎大学探検部では、中・大型合宿を行うための手順（PDCAサイクル）が存在する。

　主な流れは以下の通りである。

・春合宿・夏合宿などの長期休業中に行われる大規模な合宿を行うにあたっては、プレ合宿（本番を想定したトレーニング合宿）を行わなければならない。

各活動内容と危険性、及び事故事例について

夏の登山

○活動内容

登山とは、山が精神や肉体に与えるものを重視し、それを人生の潤いとすることを目的としている。長崎大学探検部では、ハイキング感覚で近くの山に登ったり、本格的な縦走登山を行ったりしている。登山靴やレインウェア、ヘッドライト、シュラフ（寝袋）など、多くの装備が必要となり、重いザックを背負って山頂を目指す体力が必要となる。自分のレベルに合った山々を登頂し、さらに険しく高い山に挑戦していくことも、登山の楽しみの一つであろう。

○危険性・・・遭難（滑落）、落雷、落石など

ケイビング（洞窟探検）

○活動内容

ケイビング（caving)とは、光の届かない場所で様々な技術を駆使し、洞内で生息する生物との遭遇や測量調査などを目的としている。地上では見ることのできない生物や神秘的な光景を体験することができる。

ケイビングを行うには、つなぎ、ヘルメット、ヘッドランプ、軍手等に、水たまりの中に入っても良いような耐水性の靴などが必要である。

長崎大学では、国指定の天然記念物である長崎県の七ツ釜鍾乳洞や福岡県の平尾台などで活動している。

○危険性

滑落・・・鍾乳洞の中は暗闇が広がり、中に川が流れていることも多く、大変滑りやすい。また、鍾乳洞は壁が長年、水滴によって削られ奇抜な形をしている。足を滑らせ穴に落ちてしまうというケースがある。

遭難・・・鍾乳洞は複雑な形をしているので、読図（地図を読み解くこと）に失敗し、本来通るルートと違うものを選択してしまうということがある。洞窟内では携帯電話が使用できないので、連絡が取れず危険な状況に陥りやすい。

冬山

○活動内容

冬山登山では、冬山でしか見ることのできない白銀の世界を体験し、生命の極限を知ることを目的としている。夏山よりさらに多くの装備が必要となり、トレーニングや座学で心身共に充実していなければならず、毎年少数精鋭でチャレンジしている。長崎大学では大分県の九重を中心に活動している。

○危険性

遭難（滑落）・・・一時的なホワイトアウト（視界不良）などにより、道に迷うことがある。また、雪は道のないところにも連なっており、崖から滑落するケースもある。

凍傷（低体温症）・・・登山中、吹雪などにみまわれ停滞が長引くと、手足の先が凍傷となるケースがある。

ロッククライミング

○活動内容

ロッククライミングは、岩壁をよじのぼること、岩壁登攀のことを指す。ハーネスやカラビナ、ザイルなどの装備を使用する。適切な知識を修得しなければ、重大な事故につながる活動である。長崎大学では、長崎県立総合体育館で人工岩壁を登ったり（ボルダリング）、権現岩で実際にロッククライミングを行っている。身体の鍛錬に加え、恐怖心に打ち勝つ精神を身につけることができる。

○危険性

滑落・・・適切な技術、知識を持たないままロッククライミングを行うと、命綱が役割を果たさず、滑落する場合がある。

ラフティング

○活動について

ラフティングとは、ラフト呼ばれるゴムボートを、パドルを使用し激流を下るレジャースポーツである。長崎大学探検部では、毎年夏季（7,8,9月）に、熊本県にある、日本三大急流の一つである球磨川のラフティングを行っている。（別途夏合宿として行う場合もある。）活動の際には、ライフジャケットとヘルメットを着用し、この2つの装備を着用していない場合、いかなる理由があろうとも川に入ることは認めていない。また、活動の事前に、探検講座という講座を行い、ラフティング活動を行う上での基本動作、注意点等を習得させ、その上で活動を行う。夏場の猛暑の中、冷たい川で水しぶきをあびるスポーツとして人気の活動であるが、同時に危険性も伴う活動でもある。

○危険性

溺死・・・PFD（ライフジャケット）を装着していても、激流にのまれて命を落とす場合がある。

沢登り

○活動について

沢登りとは、沢（河原）をヘルメット・沢靴（裏地がフェルトになっており、苔むした岩の上などで滑らないようになっている）等を着用し、源流に向かって登っていくというスポーツである。遊泳、ロッククライミングの技術等を用いる。滑るということも危険の1つとして挙げられるが、落石などの様々な危険も潜んでいる。長崎大学探検部では、夏季（5.6.7.8.9月、梅雨時期は除く）に沢登りを行う。自力で源流まで遡行するというスリルあふれる活動として人気である。メインフィールドとしては、長崎県の轟谷が挙げられる。

○危険性

溺死・・・フィールドによっては高さ5～8ｍにもなる滝があり、滝壺にのまれると水面に上がってくることができずに命を落とす場合もある。

落石・・・沢では大小様々な岩が存在している。その中の浮石に触れ後続メンバーに岩がぶつかる場合がある。

**緊急連絡マニュアル**

事故パーティー

現地連絡先

顧問

長崎大学学生支援課課外活動班

部員連絡先

**在長連絡本部**

収束後

事故者家族

現役　OB

1. 事故パーティーは現地連絡先へ事故の内容（場所、状況・負傷者の症状、負傷者以外の安全性）を述べる。その後、緊急連絡マニュアルにどう従うかを話す。レスキューが来たら、事故者家族への連絡を要請する。
2. 緊急連絡先のOBの人から、顧問や支援課へ事故の発生を報告し、それぞれ対応してもらう。また、緊急連絡先の現役は、在長の現役・OBに事故の発生を知らせ、招集をかける。このとき、最初の呼びかけのみメーリングリストを用いてよい。（使う場合、返信しないように一言添えること）

事故の経過などをメーリングリストで回すことは厳禁である。

招集後、在長連絡本部を立ち上げる。

1. 在長連絡本部を立ち上げたことを現地連絡先に報告し、以後連絡を取り合う。現地連絡先に保護者が現地に来るかを聞いておく。

事態の収束後、CLと部長は事故者家族に事故の概要の説明などを含めた適切な対応をとる。部長やCLが事故当事者の場合は、SLや副部長が代理を務める。

**事故発生時の動き**

緊急時は次の３通りを想定する。

1. 自力で救助ができる場合

　　A現地パーティー

a　事故発生の際は即座に合宿を中止し、負傷者の応急処置を行うとともに、部員連絡　先・OB連絡先に連絡を行い、対応を伺う。

　　b　負傷者を速やかに最寄の町へ移動させる。

 c　事故発生以降の行動は、こまめに正確に記録する。

 B部員連絡先

　　a　現地パーティーから連絡があった際は、それまでの経緯、現在の状況などを細かく確認し記録する。

b　OB連絡先･在長崎部員・他合宿パーティーへ速やかに連絡を取る。その際記録した内容を中心に伝え、個人的な意見は控える。

c　長崎からのレスキューについては、現地連絡先・在長崎部員・OB連絡先などと協議の上、判断･手配する。

1. 事故が起こり、自力で救助ができない、外部機関に救助を要求する必要がある場合

　　A現地パーティー

 a滑落、墜落等により負傷者の発見が困難な時は、二重遭難を防ぐために単独での探索は控える。

　　b 事故発生現場を可能な限り正確に把握し、速やかに最寄の町に出て部員連絡先･現地連絡先・地元警察などに連絡を取り救助を依頼する。尚、事故発見現場近くに人を残すか否かの判断は、その場の状況に応じて柔軟に対応する。その際、二重遭難を防ぐことを第一に考え、その決定は協議の上CLまたはそれに対応するものが行う。

　　c 現地連絡先、地元警察などと協議の上、現地捜索本部を設置する。

　　B部員連絡先

　　a 現地パーティーから連絡があった際は、速やかにOB連絡先･在長崎部員・学生課に連絡を取り協議のうえ、長崎連絡本部を設置する。その際、緊急連絡先の部員の電話番号を各連絡先に伝える。

　　b 長崎から派遣する部員の決定を行うとともに、事故者家族に連絡を取り現地への移動の意志を確認する。

　　c 他のパーティーにも早急に連絡し、合宿を中止するように伝える。

　　d 混乱を避けるためにマスコミに対して、各個人は決して意見を述べず、その窓口は現地連絡本部、長崎連絡本部のみとする。

1. 決められた活動終了時刻を過ぎても連絡がなく遭難などが考えられる場合

　A現地パーティー

　a 連絡し忘れなど、混乱を招くようなことがないようにする。

　b 定めておいた連絡日までに合宿終了が不可能なときは合宿を中断する。

　　尚、合宿のスタートから遅れるときは改めて期限（連絡日）を指定する。

　B部員連絡先

　a 現地連絡先などに現地の天候、状況などを尋ね、様子を探る。

　b 明らかにおかしいと判断した場合は、OB連絡先・在長崎部員・学生かに連絡を取り協議のうえ、長崎連絡本部の設置を考える。